

講演録

大田南畝が江戸、長崎で垣間見た鄭成功の書、詩、書簡などについて【サマリー】

齊藤孝治

昨今の日中関係は、1978年、日中平和友好条約が締結されて以来、最悪の状態に陥っている、と言っても過言ではない。

それは取りも直さず、日中双方に相互理解が欠けていたり、不十分であったりしているからに他ならない、と思う。

その意味で、たとえ両国間に政治的な齟齬があるにしてもお互いを知り、知ろうとする努力は緊急に必要なことだ。

そうしたことを考えると、江戸時代中期、四方赤良、蜀山人として有名な戯作者、大田南畝の存在を忘れることは出来ない。

その際、併せて考えなければならないことは、南畝の家は「御徒」という幕府の小臣で、彼自身もそうであった、ということだ。つまり南畝は文人であると同時に幕臣という顔も持っていたのである。

そして南畝は文化元年（1804年）から一年間、中国との唯一の窓口である長崎で奉行所に勤務し、直に中国にふれ合う機会も多かった。

その象徴的な例に当時、中国で「官吏、商人必携の書」と言われた「廣輿古今鈔」との関わりがある。

同書は中国の両京から省、府、県に至るそれぞれの地の歴史、行政、人口、賦税、山川、史跡、交通を要約したもので、南畝はそれを長崎で入手すると早速、精読して幕府に対し「中国を学び、知妥する上で中国全土の地誌を幕府の書庫に揃えるべきである」と進言したのだ。

こうした中国への関心、興味は、政治、外交、文学はもとより医学、料理、戯劇、民芸にまで及んだ。

言うまでもなく、日中混血児で台湾解放を果たした鄭成功についても同様であり、彼の書や手紙を入手したり、独自の詩句を創ったりしていた。

その詩句は「忠義空しく傳ふ国姓爺、終に看る韃靼（だったん、清のこと）中華を奪ふ」というものである。

とにかく南畝の中国への関心、興味は、長い日中交流の歴史によって彼らに敬意、好意を抱いていたからだ、と思う。

南畝の著書「一話一言」「瓊浦雜綴」などには、実に中国語の引用が多い上に、訳文も目立っているのだ。

中国語が南畝などその頃の知識人の血となり、肉となっていたのだろう。

万事、省みて「他山の石」にすべきではないだろうか。